高尾山古墳ガイドブック

『スルガの王 大いに塚を造る』

沼津市教育委員会
沼津市文化財センター

例　言

1．本書は平成24年7月22日に沼津市民文化センター小ホールで開催される「高尾山古墳シンポジウム」の参考資料として作成した。

2．作成にあたっては、沼津市教育委員会が平成24年3月に刊行した『沼津市文化財調査報告書第104集高尾山古墳発掘調査報告書』をもとにしたほか、第Ⅵ章「発掘調査の成果と課題」・第Ⅶ章「自然科学的分析」を担当された諸先生方ならびに諸機関の成果も反映させていただいた。

3．本古墳は発見当初には方墳と考えられ、墳丘上に鎮座する神社の名前を冠して「高尾山古墳」と呼ばれていた。しかし昭和54年に沼津市教育委員会が発行した遺跡地図には、「辻畑古墳」の名称で登録され、発掘調査中の報道も「辻畑古墳」であった。本古墳の報告書刊行事業を開始するにあたり、沼津市教育委員会では正式名称を「高尾山古墳」に戻すことにし、平成23年6月23日付けで静岡県教育委員会に対して名称変更に関する届け出を行った。

4．本書の執筆・編集は池谷信之（沼津市教育委員会事務局文化振興課主幹）が担当し、原田雄紀（同主事）、北佳奈子（同臨時嘱託）、矢田晃代（同臨時嘱託）、高林千明（同整理補助員）の協力を受けた。

5．本書の作成にあたり、以下の各氏・各機関からご指導およびご協力を得た。
赤塚次郎・岩本貴・大塚初重・佐藤祐樹・滝沢誠・平林大樹・渡井英誉・
株式会社ラング・株式会社シン技術コンサル

高尾山古墳に葬られた人物、「被葬者」をここでは仮に「スルガの王」としてみました。彼の治めた領地が後の駿河国へと移り変わっていきます。

「スルガの王」

目　次

■Ⅰ なぜ人は墓を造るのか？

① 死後の世界　② 弥生時代のムラと墓
③ 古墳の形と沼津の古墳

■Ⅱ 高尾山古墳の造られた時代

① 高尾山古墳はどこにあるのか？　② 稲作と弥生時代
③ 弥生時代から古墳時代へ　④ 弥生時代の愛鷹山

■Ⅲ 高尾山古墳はどのように造られたのか？

① 築造過程を立体的にみる　② 古墳の形と大きさ
③ 古墳の設計規格を読み解く

■Ⅳ「スルガの王」のイメージに迫る

① 旅立ちに携えしもの－副葬品－
②「スルガの王」の埋葬年代を探る

■Ⅴ おわりに －「スルガ」生まれし場所で－

ジッキー2号　タカオさん

発掘調査で奮闘した「タカオさん」と相棒ジッキー君。ジッキー君は壊れて2号が後を引き継ぎました。2人で古墳の案内をします。

Ⅰ なぜ人は墓を造るのか？

① 死後の世界

人は死んだらどうなってしまうのでしょうか？死んだ人はどこへ行くのでしょうか？

かつては無限に続くと思われていたこの宇宙でさえ、最新の科学は始まりと終わりがあることを明らかにしてしまいました。考えようによってはこんな恐ろしいことはありません。「死んだらすべては終わり。」多くの人はこの抗(あらが)えない「事実」をなんとなく意識しながらも、日々を忙しく生きることで死を無意識に遠ざけながら過ごしています。

今も昔も人類共通の悩みとなってきた「死」について、宗教は死後の世界を描くことで、人々をその恐怖から救おうとします。肉体と魂を別のものとして捉え、肉体は滅びても魂は永遠に生き続ける、という教えは多くの宗教に共通しています。

明確な教義を整えた宗教が登場するはるか前、縄文人たちは、魂はもちろん肉体さえも「まだ生きている」と考えようとしていました。彼らは墓を内側に取り込むようにムラを造り、死者とともに集団生活を送りました。また時には白骨化した遺体を掘り返して、再び埋葬し直すこともありました。彼らにとって「死」は終わりではなく、さらに続く人生の節目、七五三や成人式などと同じような通過儀礼でした。祖先崇拝は祖先がなおも、どこかで生きていることを前提とし、自分たちもまた生き続けることの希望ともなっていたのです。

冥界に行ってしまったはずの故人が、「千の風」となって愛する人を常に見守っている、という内容の歌が、多くの人の心を捉えました。私たちの胸の奥底に眠っていた縄文の死生観が共鳴したのかもしれません。

高尾山古墳が作られた古墳時代の初め頃、人々が死と肉体についてどのように認識していたのか、実はその手掛かりはほとんど残されていません。古墳時代の終わり近く（８世紀初め頃）に築造された沼津市清水柳北１号墳では、火葬骨が埋葬され

第１図　上空から見た高尾山古墳（右が北）

た痕跡が確認され、すでに仏教思想が一部で導入されていたことがわかります。しかし高尾山古墳が造られたのは、それよりさらに450年ほど前のことで、もちろん火葬は行われませんでした。

高尾山古墳では、墳丘頂部に長さ4.96 mの楕円形をした墓坑が設けられていました。その形から墓坑の中には丸木舟のような形をした木棺（舟形木棺）が置かれたと考えられています。木棺の大部分は朽ちてしまっていましたが、底面には水銀朱が敷き詰められ、その上に遺骸が置かれました。

水銀朱は水銀と硫黄の化合物で、当時から入手が難しく高価な鉱物でした。毒性が強い反面、防腐効果に優れ、遺骸を長く保存しようとする意図が感じられます。舟の形をした木棺は、死後の世界への旅の姿を示唆しているようにも思えます。

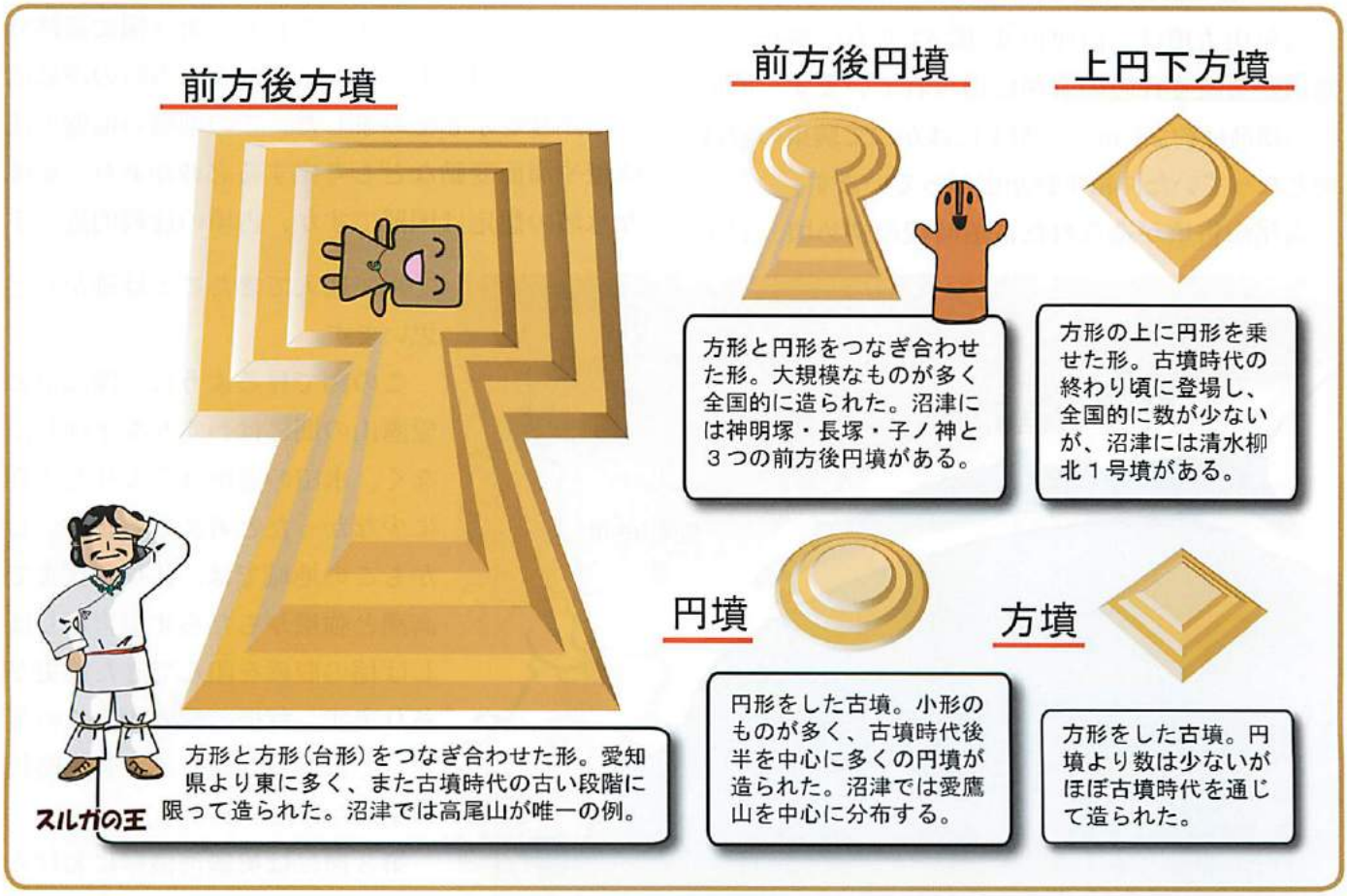
②弥生時代のムラと墓

古墳が示しているのは、その時代の死生観や宗教心だけではありません。

弥生時代の後半を中心として、「方形周溝墓」といわれる、四方を直線的な溝で囲んだ一辺数m～10 m程度の方形の墓が造られました。愛鷹山麓でも、標高150 m付近を中心に弥生時代のムラが広がっており、方形周溝墓の多くは、それぞれのムラの縁辺付近から発見されています。また住居跡に対してその数が極端に少ないことから、集落内の少数の有力者だけがそこに葬られたと考えられています。

ところが、高尾山古墳は当時のムラの密集地ではなく、そこから1 km～2 kmほど離れた山裾に造られています。つまりこの古墳は、集落に付随した墓という性格から脱しており、単独で墓域だけの空間を形成している点が、弥生時代の墓制と決定的な違いとなっているのです。

この古墳に葬られた人物（被葬者）は、集落内の有力者ではなく、複数集落を統御したさらに大きな政治的・経済的な力を持った人物だったのではないか、と考えることもできるのです。



第２図　さまざまな古墳の形

③ 古墳の形と沼津の古墳

400年以上も続いた古墳時代には、様々な形の古墳が造られました。第2図にその代表的なものを示しました。

高尾山古墳の形は前側に方形（台形）、後方にも方形の墳丘を組み合わせているので、**前方後方墳**と呼ばれています。古墳時代の古い段階に多く造られ、東海地方より東に多く分布することから、邪馬台国に対抗した狗奴国（くなこく）に結びつけようとする考えもあります。

前方後円墳は古墳時代の前半を中心に全国的に広がり、大仙古墳（伝仁徳天皇陵）のように300mを超える大きさのものまで造られました。沼津市内では神明塚古墳・長塚古墳・子ノ神古墳の3つの古墳がこの形です。

古墳時代の後期になると膨大な数の**円墳**が造られました。大きさは径数m～10数mの小規模なものがほとんどで、古墳という墓制が「首長層」といわれる階級から、地域の有力者にまで普及してきたことを示しています。

沼津市石川古墳群には、140基以上の円墳がありました。愛鷹山ではこれ以外に、井出古墳群・根古屋古墳群・柳沢古墳群・八兵衛屋敷古墳群などの古墳群があり、全体では1000基を超す古墳が存在したと考えられます。

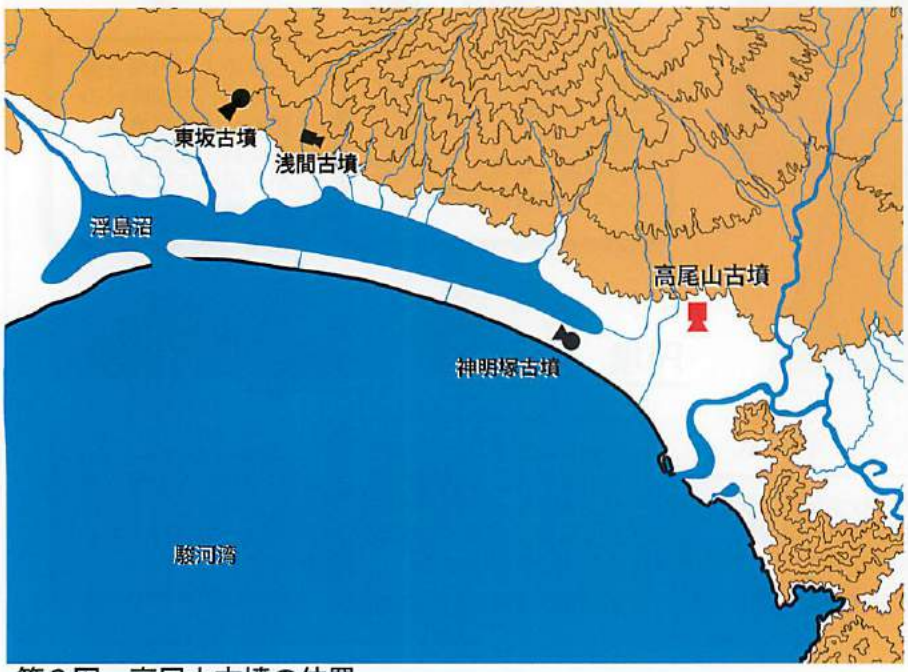
上円下方墳は古墳時代の終末期にわずかな数が造られています。沼津市清水柳北1号墳には火葬が行われた痕跡があり、仏教との関わりの深い墓制であるという考え方があります。

II 高尾山古墳の造られた時代

① 高尾山古墳はどこにあるのか？

高尾山古墳は、沼津市東熊堂北方（ひがしくまんどうきたかた）にあり、愛鷹山から続く丘陵の末端に造られています。墳頂部の標高は約21mで、眼下にはかつて駿東の穀倉地となっていた沖積平野が広がっています。

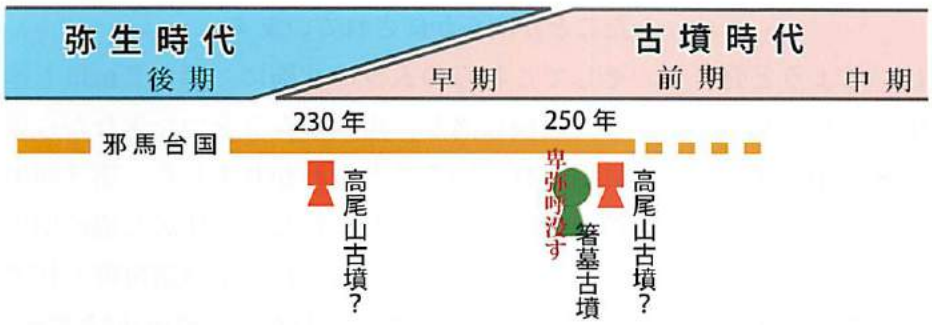
高尾山古墳が造られた古墳時代の初め頃、沼津市の西部に広がる浮島ヶ原は、今の浜名湖のような海水の流入する汽水（きすい）湖でした。第3図に遺跡分布の状況や旧地形などを手掛かりに当時の浮島沼の広がりを示してみました。この地域の地盤の沈降量や海面変動なども考慮する必要があり、正確な水域の想定は困難ですが、古墳の比較的近くまで舟で進入できたことは確かだと思います。



第3図　高尾山古墳の位置

この図で見るように、浮島沼と愛鷹山の間にはわずかな平地しかなく、水田の適地は今よりもさらに少なかったと考えられます。しかもこの地域では、江戸時代まで高潮と強風がもたらす塩害がしばしば稲の収穫を阻（はば）んできた歴史があります。背後の愛鷹山もこのあたりでは傾斜が厳しく、弥生時代の集落も分布しません。

第3図には奥駿河湾岸における古墳時代前期の古墳の分布も示し



第４図　弥生時代から古墳時代への移行と高尾山古墳の年代

てみました。神明塚古墳を除けばこの時期の古墳は、浮島沼からやや離れて、平地を望む緩やかな丘陵地の末端に築かれていることがわかります。

田子の浦の開口部は現在よりもかなり広かったため、かつての「東海道」は愛鷹山の山裾に迂回していたものと思われます。根方街道の前身です。その道を西から東へとたどる人々が、愛鷹山と浮島沼にはさまれた狭い平地を抜け、最初に目にしたのは、尾根の末端を切り開いて築かれた高尾山古墳の偉容でした。古墳が見下ろす平地には、弥生時代に開発された水田が広がり、その水路には愛鷹山を流れ下った河川からの水が、隅々まで行き渡っていたことでしょう。

② 稲作と弥生時代

多くの中学校社会科の教科書では、稲作が始まった時代を弥生時代であるとし、またある教科書には「稲作がさかんになると、社会のしくみも急速に変わり、小さな国々ができ、人々を支配する有力者や王が出現しました。」と記述されています。

そのとおりなのですが、ではなぜ稲作が盛んになると、支配者が登場するのでしょうか。縄文時代には王はいなかったのでしょうか。その謎は稲という穀物の優れた性質に秘められています。

稲籾は管理さえよければ、数年に渡って食べられる状態を維持できます。また収穫できるのは田（水田・陸田）という開墾によって整えられた場所に限られます。稲の特徴は保存性と集約性ということができるでしょう。秋になって収穫直前の稲を、他のムラに奪われたことを想像してみてください。彼らは来年の春に蒔（ま）く種籾もなく、ほとんど食料のない状態をどうやって堪え忍んでいくのでしょうか。いっぽう奪った側の集団は、稲づくりの手間に比べれば、実にわずかな労力で（多少の犠牲が出たかもしれませんが）、あり余る食料を手にしたことになります。稲を奪われた集団が生きていくためには、奪った集団が保有する食料にすがるしかありません。

縄文時代の食料となったシカやイノシシ、魚貝類やドングリ類は、稲のような特徴を備えていません。つまり縄文時代には弥生時代のような、奪うべき食料が存在しないのです。

稲作技術の伝来は、自然の動植物に依存する食生活を安定させたいっぽう、支配する側とされる側という、江戸時代末まで続く階級社会を登場させるきっかけともなりました。縄文時代は１万年以上続きましたが、弥生時代は長く見積もっても千年ほどで、次の古墳時代へ移行していきます。

③ 弥生時代から古墳時代へ

古墳時代は、高い塚をもつ大型の墳墓（＝古墳）が造られた時代です。一部の地域では、土を意図的に盛った墳丘墓（ふんきゅうぼ）が弥生時代の後期には登場してきます。それが次第に大形化してくると、しばしば「弥生時代の墳丘墓」であるのか、「古墳」なのか、という判断が分かれることがあります。「高い」「大型」という定義には、多分に主観的な部分があり、何メートルのものから「古墳」とするという統一された見解はありません。

邪馬台国の都に擬せられることもある奈良県桜井市纒向（まきむく）遺跡の近くに、箸墓（はしはか）古墳という前方後円墳があります。なお異論もありますが、築造の年代は250年頃とされ、全長は約280ｍもあります。誰も疑いようのない古墳の登場であり、これ以降を古墳時代前期、以前を古墳時代早期として、中期・後期を加えて古墳時代を４期に区分することも多くなりつつあります。第４図はその区分にもとづいて、弥生時代から古墳時代への移行を模式化し

たものです。

魏志倭人伝に記された邪馬台国は、ちょうど弥生時代の後半から古墳時代の初め頃に存在したことになります。女王卑弥呼の死は248年頃と推定されており、その墓が箸墓古墳ではないか、と考える研究者も増えています。

後に改めてすこし詳しく説明しますが、高尾山古墳の築造年代については、2つの考え方があります。そのおよその年代についても第4図に示しました。高尾山古墳の報告書で「考察」を担当された先生方は、年代の特定には慎重でしたが、ここでは敢えておよその位置を示してみました。

④弥生時代の愛鷹山

愛鷹山麓では弥生時代の後期後半になると、爆発的と言っていいほど、遺跡の数が増加してきます。第5図にはこの地域の弥生時代の遺跡分布を示しましたが、そのほとんどが後期後半に属しています。数十回も繰り返された発掘調査の結果、愛鷹山麓全体では数百軒におよぶ住居が、同時に存在したことが明らかにされています。

そしてこれらのムラの北端に、深さ2mにも達する大規模な溝が、複数のムラをつなぎながら東西に掘られていることもわかりました。第5図中では赤いラインで示しましたが、住居と溝の関係がよく理解できるように、八兵衛洞（はちべえぼら）遺跡群の状況を第6図に示しました。八兵衛洞A遺跡・同B遺跡・同C遺跡は、谷に隔てられてそれぞれ別のムラのように見えますが、北端の溝は尾根を貫き谷底を渡り、これらのムラの北限を画しているのです。

これまでそれぞれ別の遺跡と思って調査していたムラは、実際にはその北端を大溝で画された一つの大集落であった可能性が浮上しているのです。

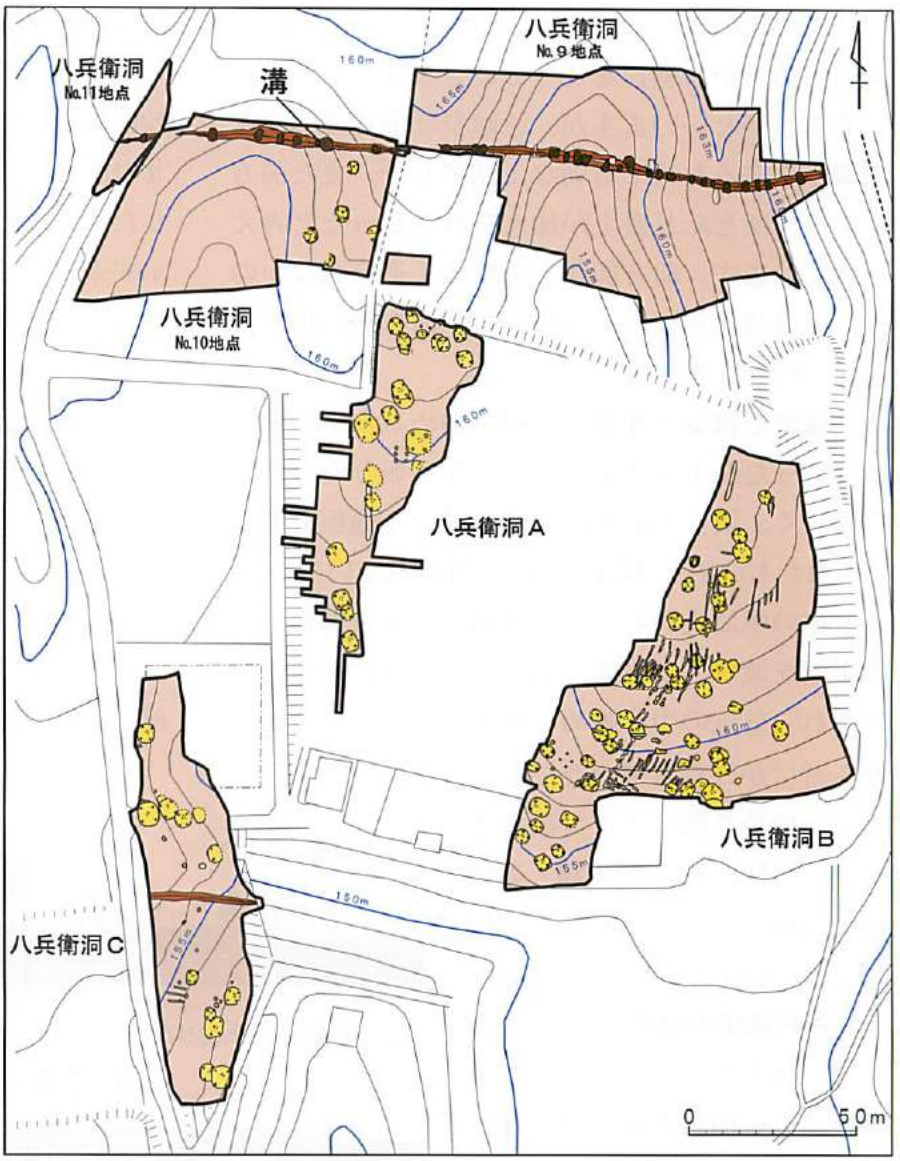
誰が何のためにこの大がかりな土木工事を敢行したのか、詳しいことはわかっていません。しかし、その背後に多くの人員を動員することができる政治的な権力、専門的な用語を使えば「首長」の存在を想定することはできるでしょう。そして数百軒に達する大集落は、当時の「クニ」にも準じるほどの規模なのです。魏志倭人伝の記した倭国を

第5図　愛鷹山麓を中心とした弥生時代の遺跡分布

構成する「百余国」の一つであったかもしれません。

しかし、この大集落は古墳時代初頭にかけて急速に衰退していきます。住居跡は例外なく火山灰とスコリアによって埋められており、富士火山の噴火がその原因となっているのかもしれません。おそらく人々の多くは、より水田に近い愛鷹山の山裾や低地へと、新たな居住の地を求めたものと思われます。

いっぽう最近の調査によって、溝は古墳時代初頭までその機能を維持し、方形周溝墓での祭祀も継続しているものがあることが明らかになりました。高尾山古墳が築造された時にも、規模は縮小しながらも、この大集落はその形をとどめていたと思われます。溝の敷設を指揮した首長と高尾山古墳の被葬者「スルガの王」が同一人物であったかどうかは定かではありません。しかし、一部にせよその権力の基盤は受け継がれていたものとみられます。



第６図　八兵衛洞遺跡と北端の溝

Ⅲ 高尾山古墳はどのように造られたのか？

① 築造過程を立体的にみる

古墳時代の概説書には、必ず古墳の大きさや形の変化についての説明がありますが、具体的な築造の過程を復元しようという試みはほとんどありません。それは高尾山クラスの大きさの古墳を全面的に調査した例が少なく、具体的な工程があまりよくわからなかったためです。幸いなことに、この古墳ではその大まかな流れを明らかにできたので、以下ではイラストを使いながら説明していきましょう。

１．築造以前の姿　古墳ができる少し前、この場所は弥生時代後期の住居が点在するムラでした。古墳は被葬者が生前から造り始めるとされているので、この場所を選んだのも「スルガの王」だったのでしょう。

２．周囲の整地と墳丘の削り出し　選んだ場所は尾根の頂部だったので、もともとの地形を削って平らな場所を作りました。まず地表面近くの柔らかい部分を薄く削り、それから墳丘の周りを、深い部分では２ｍ近くも削り出し、墳丘のシルエットを出現させています。

３．周溝の掘削と墳丘の版築　出現した墳丘の形状に沿って周溝を掘り、その土を墳丘上に積み上げていきます。愛鷹山では深さによって土（地層）

の状態が異なるので、それらを順序よく積み上げ、突き固めながら墳丘を造っていきます。こうした作業を版築（ばんちく）といいますが、急傾斜な墳丘の側面を崩壊から守るために有効な工法でした。また前方部には、ほとんど盛土が加えられなかったと考えられています。前方部があまり高く造られないのは、古墳時代初期の前方後方墳・前方後円墳に共通する特徴です。

4．墓坑の構築と埋葬　木棺を納めるための墓坑は、いったん土を水平に盛ってから堀り直したのではなく、墳丘の最上部を盛っていく過程で形づくられたもので、「構築墓坑（こうちくぼこう）」と呼ばれています。

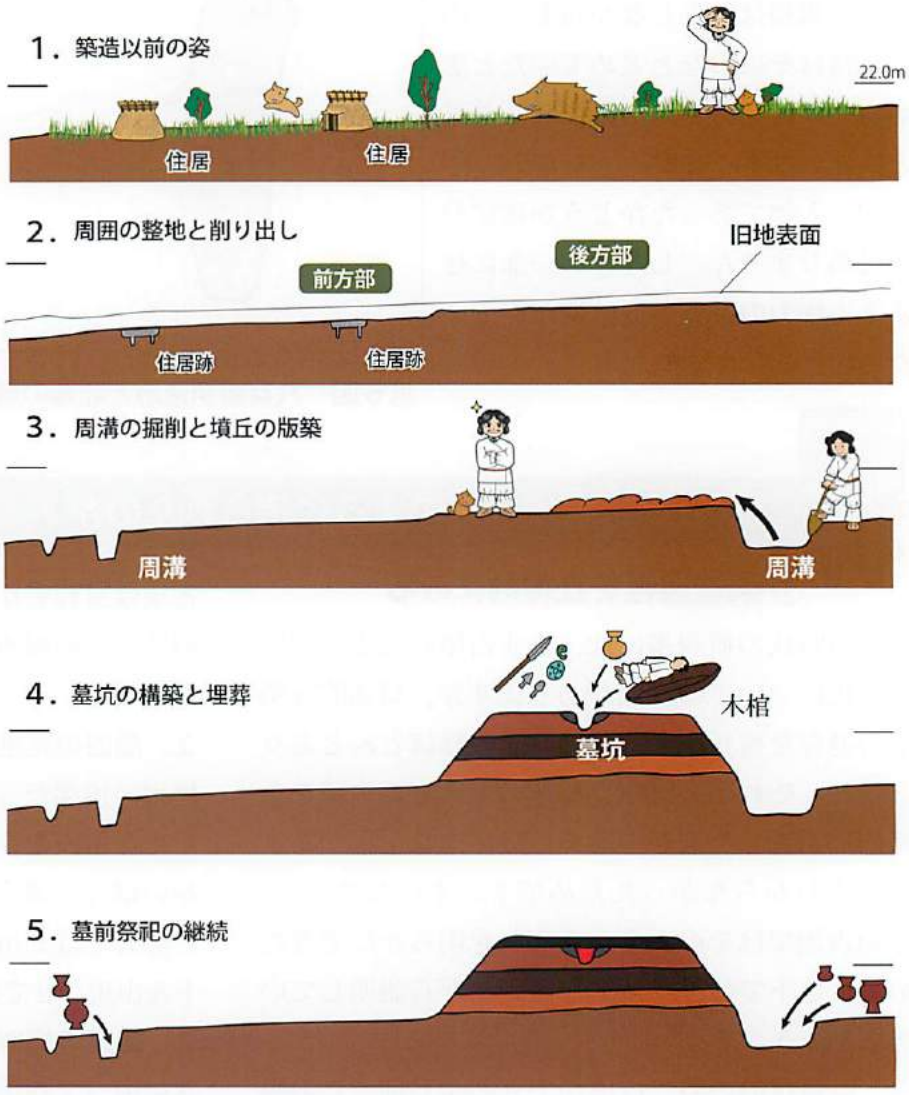
木棺の中に入れられた被葬者は、前方部南東側の土橋を渡り、前方部を通って後方部にかつぎ上げられ、墓坑の中に納められました。勾玉は始めから首にかけられていたでしょうが、槍や鉄鏃はここで副葬されたと思われます。「破鏡」の祭儀が最後に執り行われ、さらに土がかけられました。

5．墓前祭祀の継続　「スルガの王」の権力を引き継いだ者、あるいはその関係者が、墓前での祭祀を続けました。周溝からは祭祀のために特別に焼かれた小型の土器が大量に出土しています。東海地方西部、北陸、近江地方との関係が深い「外来系土器」も少なからず含まれていました。故人の同盟関係を示しているのかもしれません。

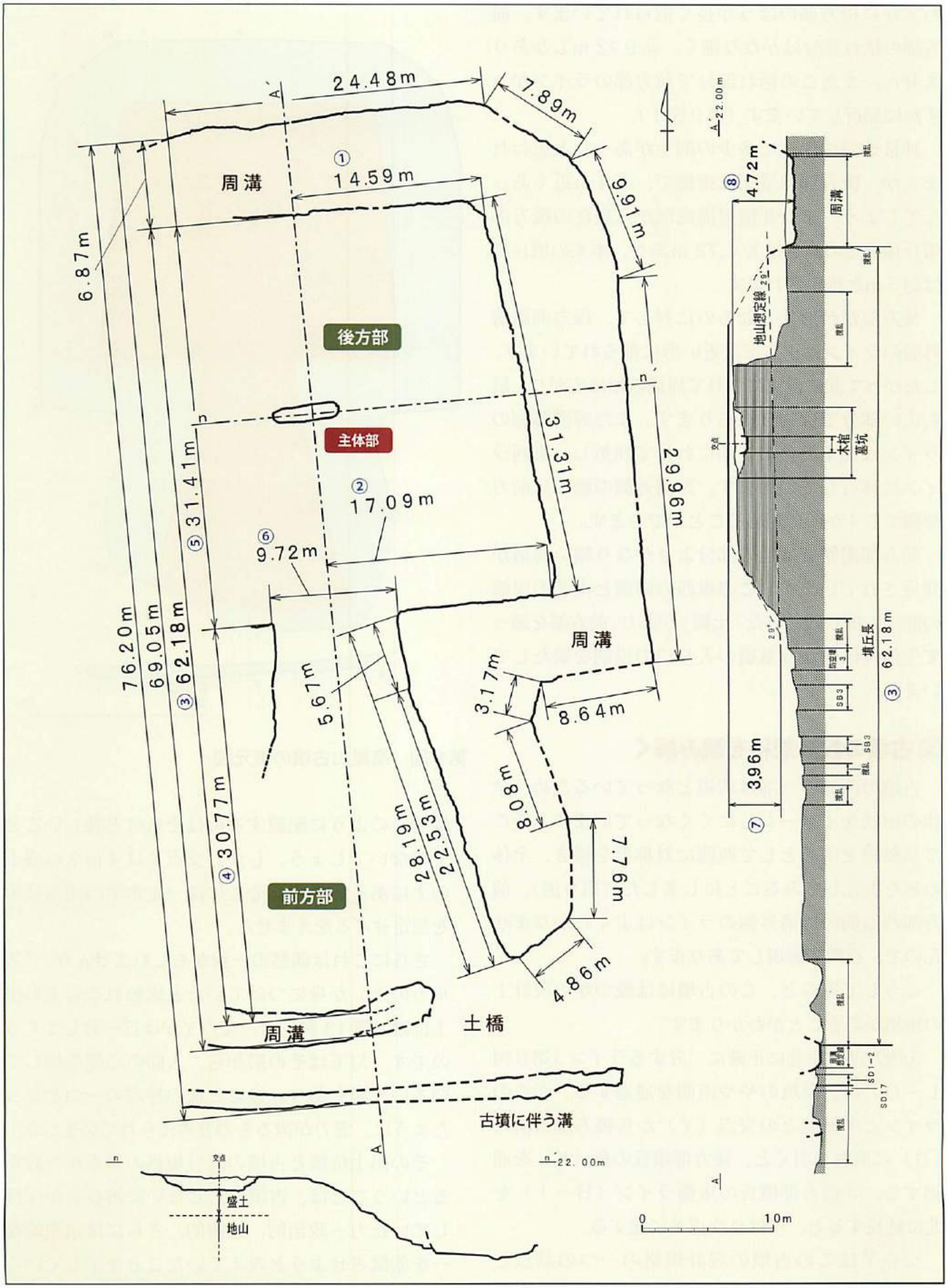
② 古墳の形と大きさ

高尾山古墳が古墳として遺跡登録されたのは比較的最近のことで、西側の周溝と墳丘の一部は南北の市道によって壊されています（第８図左部分）。したがって古墳の幅については、正確な測定値を示すことができません。ただし南北の中心となる基軸線（第８図Ａ－Ａ′）がほぼ確定できているので、後方部北側の東西幅は、① 14.59 m × 2 ＝ 29.18 m、同じく後方部南側の東西幅は、② 17.09 m × 2 ＝ 34.18 mと推定値を求めることができます。前方部は南辺のほうが北辺よりもちょうど５m長い台形ということになります。

墳丘長は基軸線上における後方部の北端から前方部南端までの長さで、③ 62.18 mとなります。前方部長は④ 30.77 m、後方部長は⑤ 31.41 mと、



第７図　高尾山古墳の築造過程と完成のイメージ（垂直方向を約２倍に強調）



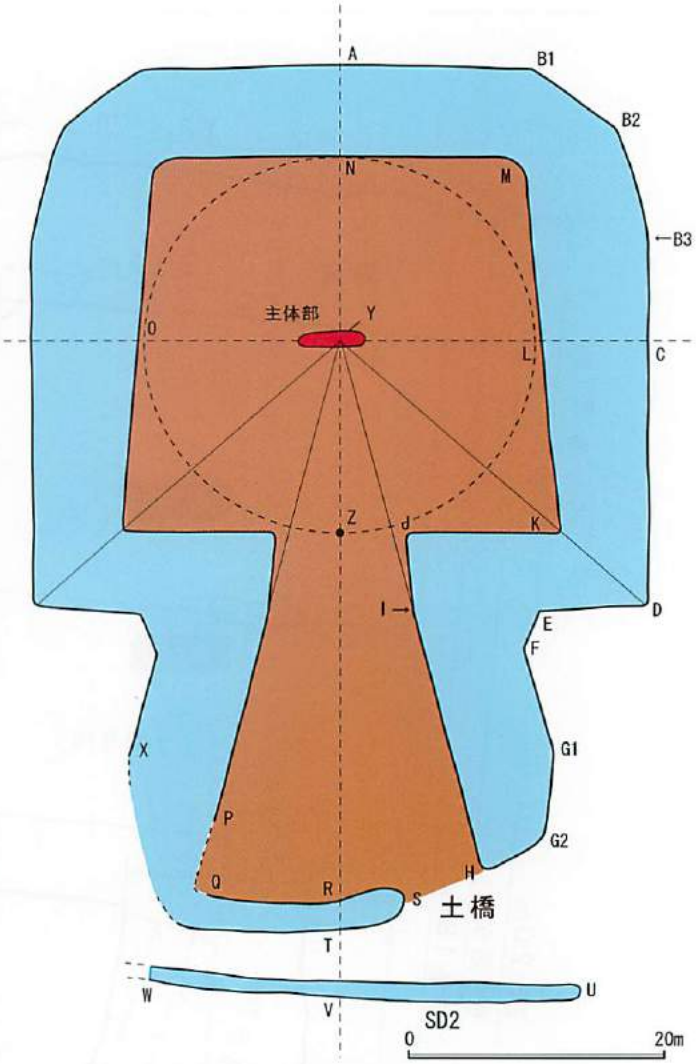
第8図　高尾山古墳の形と大きさ

わずかに後方部のほうが長く造られています。前方部の括れ部分はかなり細く、⑥9.72 mしかありません。またこの括れ部分で前方部のラインがわずかに屈折しています（第9図Ｉ）。

神社建設に伴って多少の削土があったと思われますが、後方部の盛土は南側で、⑦4 m近くあったでしょう。また北側周溝底部から現在の後方部墳丘頂までの高さは⑧4.72 mあり、本来の墳丘高は約5 mと推定されます。

後方部が台形状となるのに対して、後方部周溝外側のラインは正方形に近い形に掘られています。したがって北に行くにつれて周溝の幅は広がり、最も広い部分では約9 mあります。また周溝外側のラインは北東の角で3回にわけて屈折し、東西ラインに移行していきます。周溝外側の屈曲は前方部側でも4か所で認めることができます。

前方部南側では他の部分よりかなり細い周溝が発見されています。この東西の周溝と南北の周溝の間には掘り残された「土橋」があり、前方部を通って主体部に向かう墓道の入り口の役割を果たしています。



第9図　高尾山古墳の復元図

③古墳の設計規格を読み解く

古墳の西側の一部は市道となっているため、全体の形状をイメージしにくくなっています。そこで基軸線を中心として西側に対称形を描き、全体の形を復元してみることにしました（第9図）。前方部西南側の周溝外側のラインはよくわかりませんので、点線で表現してあります。

こうしてみると、この古墳には幾つかの設計上の規格があることがわかります。

①後方部を南北に正確に二分するライン（第9図Ｌ－Ｏ）は、墓坑のやや南側を通過する。②このラインと中軸線との交点（Ｙ）から後方部周溝角（Ｄ）に直線を引くと、後方部墳丘の角（Ｋ）を通過する。③前方部墳丘の東側ライン（Ｈ－Ｉ）を北に延長すると、やはり交点Ｙに達する。

交点Ｙはこの古墳の設計規格の一つの基点となっているのではないでしょうか。平面上で点や線をこのように配置するのはそれほど難しいことではないでしょう。しかし交点Ｙは4 mもの盛土の上にあるのです。そこには一定水準の測量技術を想定せざるをえません。

さらにこれは偶然の一致かもしれませんが、「スルガの王」が身につけていたと思われる勾玉の出土位置（第13図）と、交点Ｙがほぼ一致してくるのです。勾玉はその形から、人間の心臓を模しているいう説もあり、後に三種の神器の一つとなったように、霊力が宿るものと考えられていました。

その出土位置と古墳の設計規格の基点が一致するということは、古墳の形じたいに被葬者が保持していた力－政治的、経済的、さらには宗教的な－を象徴させようと考えていたことを示しているのかもしれません。

Ⅳ「スルガの王」のイメージに迫る

①旅立ちに携えしもの－副葬品－

江戸時代の庶民の墓を掘るとよく出てくるものに寛永通宝とキセルがあります。寛永通宝は必ず6枚、「三途の川の渡し賃」といわれるものです。キセルは故人が愛煙家だったことを示しています。現代社会でお婆さんの棺に入れられる定番は、ゲートボールのスティックでしょうか。杖という例も多く、毛糸の編み針も何度か見たことがあります。

このように故人とともに棺に入れられるものは生前の愛用品であり、その人柄を偲ばせるものが選ばれます。古墳時代の棺に入れられるもの、つまり副葬品も、故人とのかかわりが深いものが選択される点は同じです。

しかし、武力と政治、経済力と祭祀が分かちがたく首長の権力を支えていた古墳時代の副葬品は、故人の愛用品という性格以上に、その権力の基盤を誇示するという役割も負っていたと思われます。

それでは高尾山古墳に葬られた「スルガの王」の棺の中身をのぞいてみましょう（第13図）。

第10図　墓坑と副葬品の調査状況

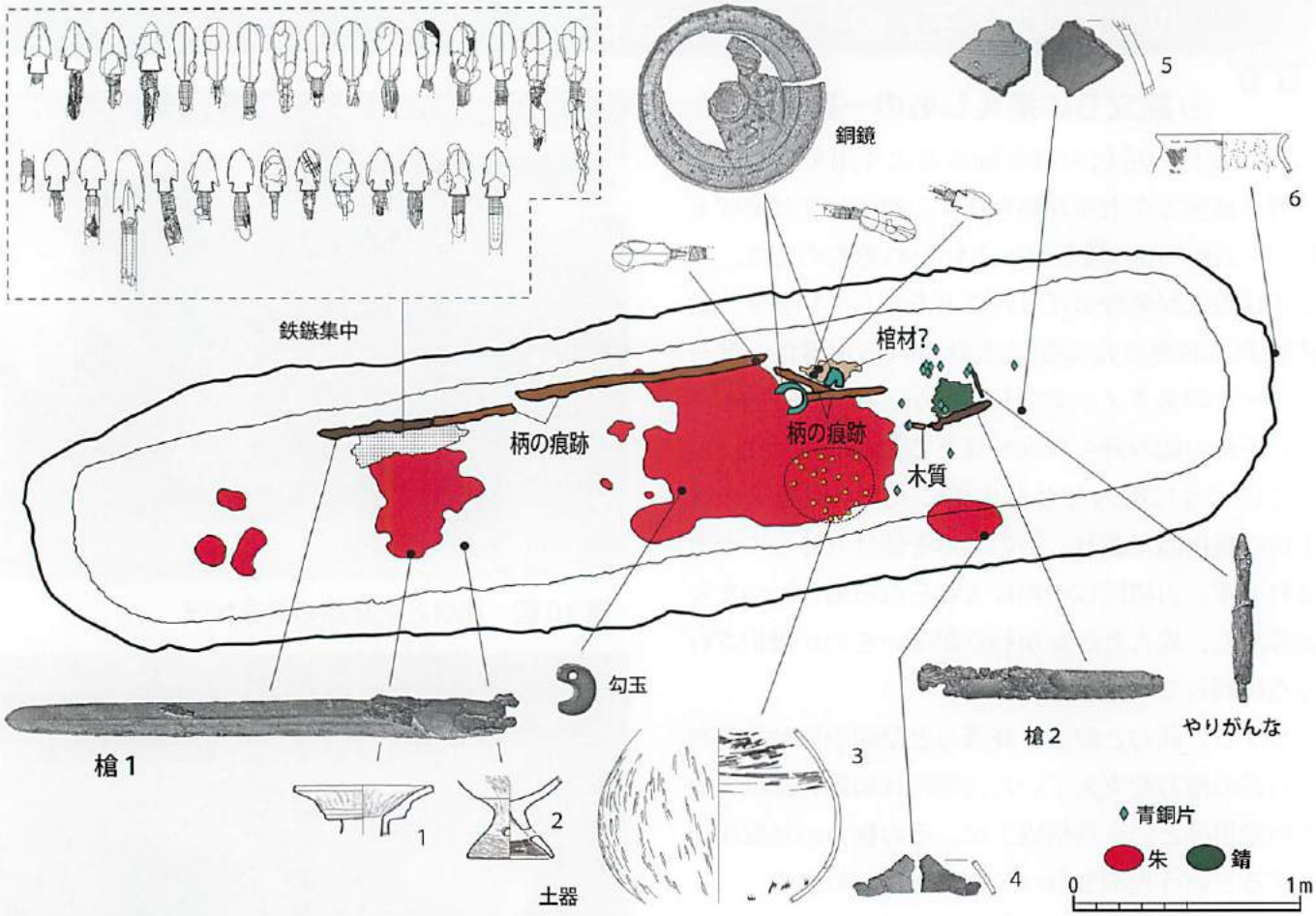
第11図　鏡と鉄鏃の出土状況（遺物の下に赤く点在するのが水銀朱）

第12図　青銅鏡（上方作形浮彫式獣帯鏡 scale ＝約2/3 後漢時代の中国で製作　3次元レーザースキャナーによる画像 裏側が鏡面）

墓坑内では形をとどめた棺は発見されませんでしたが、棺材と思われる木片が底部付近から出土していることや、墓坑の形から、舟形木棺が埋納されたと考えられています。舟形木棺の底面には部分的に水銀朱が敷かれていますが、副葬品はその上に乗るように出土しています。

出土した副葬品は、青銅鏡1面（破砕鏡）・鉄槍2点・鉄鏃32点（頸部のみのもの1点を除く）・やりがんな1点・勾玉1点と数点の土器でした。

青銅鏡　古代において鏡は必ずしも実用品ではなく、霊力が宿るもの、あるいは神の化身として、人々の崇敬の対象となっていました。



第13図　副葬品の出土状況

女性の命ともいえる鏡台を、平時は布で覆う習慣は、その霊力をおそれる古くからのしきたりです。鏡台はドレッサーに姿を変え、鏡に対する意識もすっかり変わってしまいました。

出土した1面の鏡（第12図）は後漢製で、「上方作系浮彫式獣帯鏡」と呼ばれるものです。錆がひどく模様が不鮮明になっていますが、内側（内区）には、鹿・虎・鳥・羽人（想像上の人物≒仙人≒神）が配されています。これらの獣帯の外側には、文字が彫られる銘帯があり、残されたわずかな文字から「上方作竟」の文言と、「長宜子孫」の吉祥句が刻まれていたと推定されています。

そしてこの鏡は意図的に割られて「スルガの王」の頭部の北側に置かれました。この行為の意味はよくわかっていませんが、第12図で空白になっている部分のほとんどは、ついに発見されませんでした。おそらく鏡を割った後、一部が別の場所で保管されていたのでしょう。

鉄槍　2本の槍が副葬されていますが、ひときわ目を引くのが、「スルガの王」の北側に沿うように置かれた槍1です。身の長さは45.5cmもあり、かつては剣として使われていたものが、槍に転用されたとみられます。中央を貫くの鎬の両側には、殺傷力を高めるためと思われる浅い溝が付けられています。柄の長さは約1.4 mもあり、赤漆が塗られていました。全体の長さは約1.86 mに達し、故人の武威を最もよく象徴する副葬品です。

槍2は全長23.2cmと槍1に比べれば短く、茎を柄に差し込み、そこを径1 mmほどの紐で巻き締めています。柄の本体は破断して鏡と重なるように発見されました。

鉄鏃　鉄鏃は32点が出土していますが、そのうち29点は、「スルガの王」の足元近くに集中して発見されています（第13図「鉄鏃集中」）。これらはその密集した出土状況から、矢柄から外されて鏃身～頸部のみが納められた可能性もあります。残

第14図　棺上での土器出土状況1（土器1・2）

第15図　棺上での土器出土状況2（土器3）

る3点は鏡や槍柄の末端付近で出土しました。

鉄鏃は、A－茎の部分まで一体成形され、鏃身が柳葉形になるもの（第13図鉄鏃上段）。B－同じく一体成形されるもので両側に逆刺（かえり）の付くもの（第13図鉄鏃下段、Cを除く）。C－短い茎部をもつ鏃を、別造りの根ばさみで固定するもの（第13図下段左から4つ目）、に分類することができます。

やりがんな　いうまでもなく木工用具で、木材の木肌を整えるために使います。しかしこの軸部は、木製の柄にはめ込まれた後、組紐状の細い糸で巻き締められ、さらに漆が塗布されるという手の込んだしつらえでした。実用品ではなかったかもしれません。

勾玉　この勾玉はごく小さく、長径1.25㎝しかありません。もともとは「スルガの王」の首から下げられていたものが、遺骸の崩壊などに伴い南西側に多少移動していると思われます。

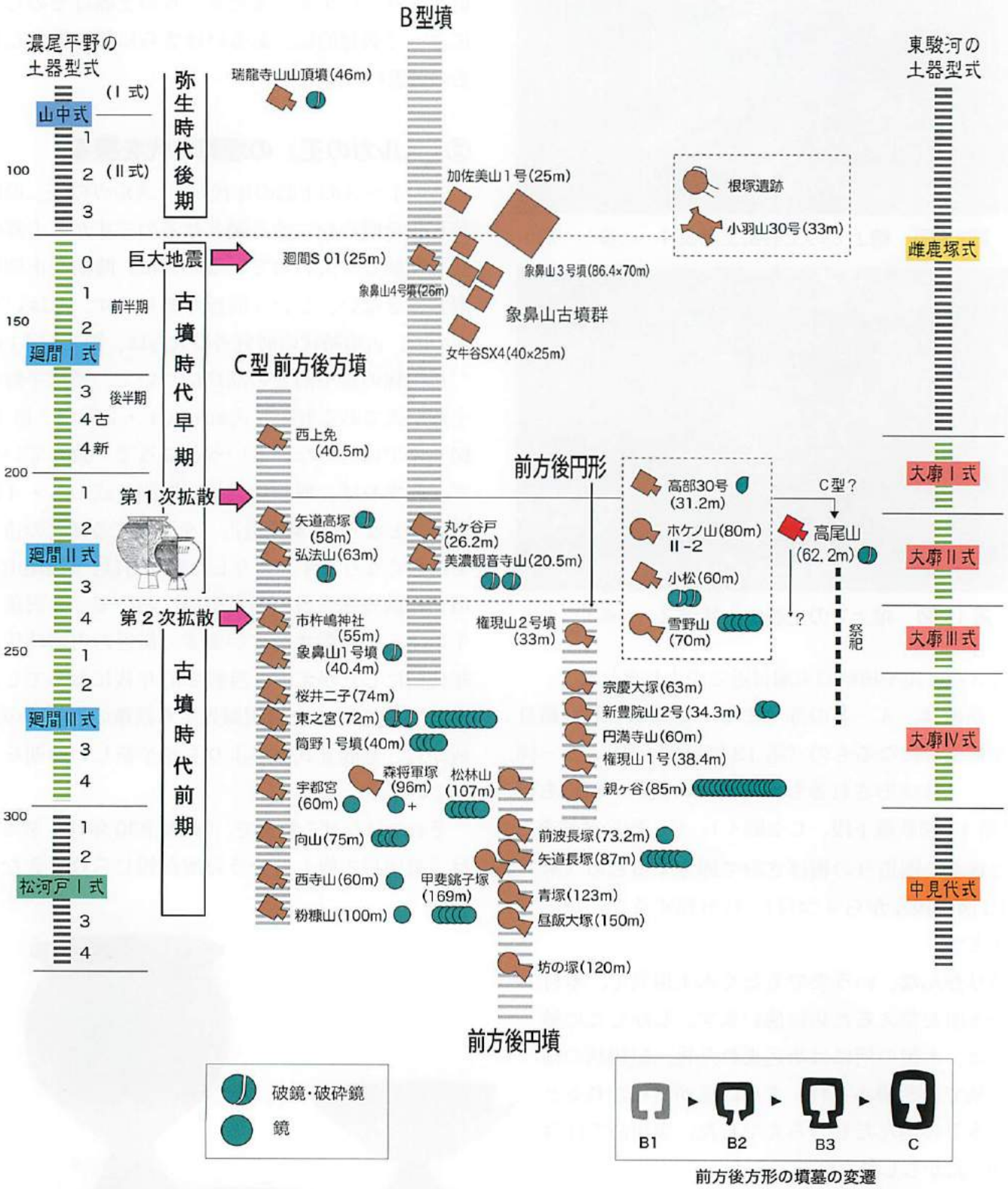
土器　これまでの副葬品はすべて墓坑の底部付近から出土していましたが、第13図1～3の土器はすべての祭儀が終了し、棺に土がかけられた後に、供えられています。また4～6の土器はその行為によって偶発的に、あるいはさらに後に混入したものと思われます。

②「スルガの王」の埋葬年代を探る

この1～3の土器の年代が、「スルガの王」の埋葬年代を明らかにする鍵となるのですが、土器の肝心な部分が失われているために、時期を正確に限定できない、という問題があります。とはいうものの、古墳時代の研究者の大方は、第13図1の二重口縁（にじゅうこうえん）の壺や同2の高坏について、濃尾平野の土器型式である廻間（はさま）Ⅱ式前半（1・2段階：第17図）までは遡らないというところで一致しています。とすれば、埋葬年代は、廻間Ⅱ式の3・4段階以降となり、「東国最古」を強調するほどの古さではなくなります。こうした考え方は、『高尾山古墳発掘調査報告書』の考察編において、寺沢薫先生によって主張されています。最近の古墳時代の年代観にしたがえば、西暦250年代になるでしょう（第4図）。また滝沢誠先生も鉄鏃の形やその組成から、廻間Ⅱ式前半よりもやや新しい時期を考えています。

それではなぜこれまで、「西暦230年代」あるいは「東国最古級」という見解が報じられてきたの

第16図　主な外来系土器



第17図　東海地方の土器型式と古墳編年（赤塚次郎氏提供図に、渡井英誉氏の大廓（おおくるわ）式編年を追加した。渡井編年は廻間編年に対比されており、大廓式と個々の古墳の対比については渡井氏の見解にそぐわない部分がある。）

でしょうか。第16図に古墳の周溝から出土した主な外来系土器を示しました。外来系土器とは他地域の土器と深い関わりをもつものや、遠距離を運ばれてきた他地域の土器を意味します。このうち1の高坏と3の器台は、紛れもない廻間Ⅱ式前半段階の土器であり、同様の土器はかなりの量が出土しています。赤塚次郎先生はこうした土器群を評価して、高尾山古墳の年代を廻間Ⅱ式前半、西暦230年代と考えているのです。

それでは第13図1・2の土器がそれより新しいことについてはどう説明するのでしょうか。赤塚先生はこの問題について具体的な見解を述べていませんが、埋葬年代を廻間Ⅱ式前半とする立場では、棺上の土器供献までの時間をかなり長めに想定せざるを得なくなります。

逆に廻間Ⅱ式後半以降とする立場には、埋葬時期よりも古くなる外来系土器の多量存在を整合的に説明する必要が出てくるのです。

Ⅴ おわりに －「スルガ」生まれし場所で－

現在の駿東郡から伊豆にかけての地域には、古い段階（古墳時代早期・前期）の前方後円墳や前方後方墳がないと言われてきました。しかし、中期とされてきた沼津市神明塚古墳が、再調査によって前期の比較的古い段階のものであることが判明し、三島市でも前期に位置づけられる向山16号墳が新たに発見されました。また沼津市の子ノ神古墳も前期古墳である可能性が浮上しています。

そこに今回の高尾山古墳が加わり、東駿河湾を囲む地域では、古墳時代前期の政治権力が大きな断絶をはさまず継承されている、と考えられるようになりました。

その後、この地域は古代国家が成立する過程で、駿河国に組み入れられていきます。7世紀後半から8世紀にかけて、駿河では最大規模となる寺院（日吉廃寺（ひよしはいじ））が当時の東海道沿いに伽藍を連ねていました。その頃、愛鷹山の麓には仏教思想との関わりが深い上円下方墳が造られ、ほぼ同じ時期に営まれた上ノ段遺跡からは、中国から海を渡ってもたらされた唐三彩の陶枕が出土しています。

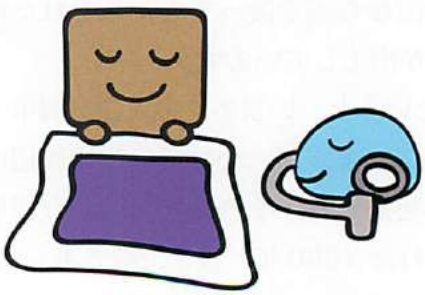
「駿河」というと、いま多くの人は静岡市一帯をイメージしますが、かつては沼津周辺に一つの中心地があり、それは駿河国から伊豆国が分国された（680年）後まで続きました。高尾山古墳は、後に駿河国を形成することになるこの地域の、最初の政治的統合を示す貴重なモニュメントでもあるのです。

前節では高尾山古墳の古さをめぐる議論の枠組みについて紹介しました。しかしその議論は、年代じたいが目的ではなく、地方における古墳時代の成立をどう解釈するか、という歴史の本質的課題に収斂（しゅうれん）していきます。ニュース性を競い合う局面では、最古・最大であることが一つの判断基準になりますが、本来、遺跡の価値というものは、地域の歴史にとっての「かけがえのなさ」によって評価されるべきものです。

仮に高尾山古墳の年代が、飛び抜けて古くなかったとしても、この駿河という地域の歴史に欠かすことのできない遺跡である、という意味で、その価値が揺らぐことはありません。

第18図　北東側周溝の調査状況

高尾山古墳ガイドブック
スルガの王 大いに塚を造る
印刷　平成24年7月20日
発行　平成24年7月22日
編集　沼津市文化財センター
発行　沼津市教育委員会
沼津市御幸町16番1号
TEL　055-931-2500
印刷　みどり美術印刷株式会社



後方部に鎮座していた高尾山穂見神社